うらら嬢の更なる受難

三条司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
うらら嬢の更なる受難

【Ｎコード】
Ｎ３０２１Ｍ

【作者名】
三条司

【あらすじ】
「雨もしたたる、良い河童」の続編？番外編？です。
変態河童の出島さんと、万年ツッコミ役のツンデレ女子高生うらら嬢の、進みそうで進まないラブストーリー。
本編終了後の夏、ふたりが出逢ってから1年経ったくらいを想定して書いています。じれじれなふたりにもう一度出逢いたい方、どうぞ。

日常から非日常への滑らかなシフト（前書き）

お久しぶりです。三条です。
無事卒論も終わり、口頭試問も終え、残るは実技試験のみです。やれやれ！
というわけで、夏にふさわしい、湿度が一気に5倍くらいになりそうな鬱陶しい出島さんをお届けです。
短期連載を考えてはいますが、更新スピードやら更新回数やらはまだ何も決めていません！↑
楽しんでいただければ、幸いです。

日常から非日常への滑らかなシフト

頭が、がんがんする。

「うう……」

情けない声で呻いてから、あたしは、何故かひどく気怠い身体を起こした。　正確には、上半身だけを起こした。　冷たい地面に手の平が触れると、そのひんやりとした感覚が、ぞわぞわと体中を這い上がって、首筋にまで鳥肌が立つ。

ごいんごいんと、頭の中で除夜の鐘撞きが行われているかのような頭痛と闘って、あたしはやっとの思いで重い瞼をこじ開ける。

「……」

しんと静まり返ったその場所は、何もない部屋。　家具もなければ、窓もない。　したがって、今が昼なのか夜なのかさえ分からない。　風も入ってこないので、外の温度がどうなっているのか見当もつかないけれど、確か、今、まだ夏。　コンクリートかと思っていたその地面は、どっこい、ものすごく年期の入った木目で、艶々と光る具合を見ると、きちんと手入れされているのかもしれない。

飴色の床に、素っ気なくグレーに塗られた土の壁。　えらく高い天井は、体育館を彷彿とさせる。

窓がないことを除けば、家具がないこともあまり気にならないほどにシックなこの部屋。　しかし、問題は窓ではないのだ。

つまり。

「ここ……どこ……？」

あたしの呟いた声は、無論誰に答えてもらえるわけでもなく、寂しく高い天井へと霧散した。

その日は、いたって普通に始まったのに。

夏休みに入って、あたしはゆっくりしていたかった。　なのに、たすくは暑さで頭がやられてしまったのか、いつも以上に元気に走り回り、そのせいであたしは予定していたよりもずっと早くに目を覚ます羽目になり、朝から喧嘩をしてしまう始末。　お母さんには怒られるし。

でもまあ、折角目を覚ましたわけだから、散歩に出かけようかと思っていたら、お母さんに掴まった。

「あら、うらら。　どこか行くの？」

「ああ、うん。　どこってわけじゃないけど、散歩にでも出かけようかなって。　暑くなりすぎる前に」

「じゃあ、ついでにこれ、おばあちゃんに持っていってちょうだい」

「朝ご飯？」

「そう」

「なんで、こっち来て食べないの？　おばあちゃん、具合悪くしたとか？」
「それがねえ」
そういえば、ここ二、三日おばあちゃんに会っていなかった。その間に何かあったのだろうかと思ってあたしが心配すると、お母さんは危機感に欠ける顔を傾げる。
「今日は、あっちで食べるんですって。　昨日の晩に言われたの。だから、具合が悪いなんてわけじゃないみたいよ。　でも、教えてくれないのよねえ」
尚も首を左右に傾げるお母さんが手にしたお盆に載せられた朝食の量を見て、あたしは何となくその理由に予想がついた。
ははーん。
とは言っても、それをお母さんに言うわけにはいかないので、あたしは適当なことを言って、お盆を受け取る。
母屋から渡り廊下づたいに、おばあちゃんのいる離れに行く。おばあちゃんの好みで、ここはまったくの和風なので、ドアをノックすることも出来ない。　だって、ドアじゃなくて障子なんだもん。しかも、両手が塞がっているので、あたしは少し大きめの声を障子越しにかけた。
「おばあちゃーん。　朝ご飯、持って来たよ。　入るねー？」
お行儀が悪いと知りつつ、面倒臭くて、あたしは裸足の親指を使って障子をこじ開け、そこに足を突っ込んで無理矢理開けた。

「おばあちゃ……」

言いながら入れば、敷かれた布団にあるおばあちゃんの姿と、もうひとつ。　夏の青空もかくや、というほどの蒼い髪を長く伸ばしたその姿が、あたしの声に驚いたのか、あぐらをかいたままの姿勢で垂直に二十？ほどジャンプした。

「何やってんだい」

呆れた声をかけるおばあちゃんに、蒼い髪の背中が狼狽える。

「ばっ、お、お前、ちょっと驚いただけじゃねえか」
「あんたは、ちょっと驚いただけで跳び上がるのかい？　肝っ玉の小さい男だねえ。　うらら、入っておいで」
「あ、うん。　ごめん、お邪魔だった？」
「いーや？　邪魔なのは、こっちの方さ」

畳の匂いがこもる部屋に入って、お盆を部屋の隅に鎮座する小さなテーブルの上に置いてから、障子を閉めた。

おばあちゃんに、あごで指さされた蒼い髪のひと、龍神ことあたしのおじいちゃんは、目の周りをうっすらと紫色に染めてあたしに挨拶をしてくれる。　髪だけでなくて、全身真っ青なおじいちゃんは、赤くなると、青と混ざって紫になってしまう、厄介な色味の持ち主だ。

「よ、よおう！　うらら！　今日も暑いな、元気か！」
「久しぶり、おじいちゃん。　あたしは、元気だよ　。たすくに叩き起こされて、微妙に睡眠不足だけど」

「早寝早起きは身体に良いんだよ。　それくらい、うららだって知ってるだろう？」

にやりとひとの悪い笑みを浮かべるおばあちゃんに、あたしは頬を膨らませてみせる。

「だってー。　折角の夏休みなのにさ」

「夏休み？　お前、学校から暇を出されたのか？　何をしたっつーんだよ」

慌てるおじいちゃんの手の甲を、おばあちゃんがぺしりと叩く。

「本当にあんたは早とちりだねえ。　うららが行ってる学校では、年に三回、休みがあるんだよ。　その間、うららは学校に行かなくて良いんだ。　宿題は、出るみたいだけどねえ」

「そ、そうか。　てっきりよ、お前が学校から閉め出されたんだと思ってよ。　だったら一度、俺様が出向いて、きっちり話つけておかねえとと思ったとこだったんだが」

「いや、大丈夫だから。　話つけなくて良いから。　ていうか、おじいちゃんが来たら、それこそパニックになるから」

「そ、そうなのかよ……？　つーかお前、何か絹に似てきたなあ、物言いが」

「良いことじゃないかい」

一応神様であるはずのおじいちゃんは、拗ねたように口唇を尖らせて、あさっての方向を向いている。　からからと笑うおばあちゃんの声に、おじいちゃんは更にむずかるように眉根を寄せた。

「うらら。　窓を開けてくれるかい？」

「え、でも良いの？　おじいちゃん、見えちゃうかもしれないよ

？　一緒に朝ご飯、食べるんでしょ？」
「大丈夫。　なあ、更紗？」
おばあちゃんだけが呼ぶことを許されるその名を口にすれば、むくれていたおじいちゃんはやおら笑顔になって、不敵に鼻をならした。
「おうよ」
言って、何事かを口の中でもごもごと呟くと、瞬く間におじいちゃんが薄くなった。　あ、違うよ？　文法間違いとか、間違った日本語じゃないよ？　いきなり、おじいちゃんの生え際が後退したわけじゃないよ？　なんていうか、おじいちゃんは確かに目の前にいるんだけど、濃度が薄くなったのだ。　髪の毛がさらさらとたなびく様も、今では目をこらしても漸くうっすらと見えるくらいだし、元々透き通るほどの青い肌だったところなんかは、本気で透き通ってしまって、おばあちゃんがおじいちゃん越しに見えるくらい。割と、ホラーです。
「は、はは……すごいね」
乾いた笑いでそう言えば、おじいちゃんは両の瞳を宝石のようにきらきらとさせた。　それから、おばあちゃんを勢い良く見据える。
散歩途中に、飼い主を振り返る犬のようなその仕草は、龍神には似使わないかもしれないけれど、おばあちゃんが何よりも誰よりも大切なおじいちゃんらしいもので、あたしも朝からにまにましてしまう。
「じゃ、お邪魔虫のあたしはそろそろ」

言いながら立ち上がると、おじいちゃんの声が背後から飛んできた。

「お、おう、うらら、そのよ、最近、その、なんだ、あれはどうなってやがんだよ」

「は？」

「だ、だから、あれだよ、お前とよ、ほら、あの、頭の悪い、なあ」

「……」

どうやら動揺しているらしいおじいちゃんを慮って、あたしはしばし首を捻って考えてみる。　そして、ふと思いつく。

「ああ。　出島さんのこと？」

「お、おうよ！　それだよ。　あいつは、どこで何してやがんだよ。まあな、俺様の大事な孫娘の周りをちょろちょろされてもよ、迷惑なんだがよ。　俺様の孫娘をほったらかしにしるってえのも、褒められねえからよ」

「出張だってさ。　いつ帰ってくるんだったかな？　忘れちゃった」

あくまで素っ気なく言ってから、おじいちゃんに背中を向ける。

「うらら」

今度は、おばあちゃんに呼び止められた。

「なに？」

「今から、散歩かい？」

「あ、ああ、うん。　そう。　暑くなる前に、外に出て風に当た

って来ようかなって」
「そうかい。　楽しんどいで」
「ありがと」

顔だけ後ろを見れば、おばあちゃんの笑顔と、おじいちゃんの透き通った笑顔がそこにあって、あたしはふたりに満面の笑顔を残してその場を去った。

「あ、結構風があるかもー」

ショーツから出た脚に、風が気持ちが良い。　頭上に広がる空に向かって、大きく両腕を伸ばすと、背筋が伸ばされて、吸い込む空気が肺に染み入るみたいで心地良い。

さて、どこへ散歩に行こうか。

あ、あれ？
さて、どこへ散歩に行こうか。
そう思ってからの記憶がない。
どこを歩いたのかも、覚えていない。　だからって、こんな部屋に転がるようなことをした覚えもまったくない。
若年性痴呆症？
んなわけないない。　そんなシリアスな病気に、健康体の見本みたいなあたしがなるわけない。　いやでも、だったら何で記憶がぽっかりとそこだけ抜け落ちているんだ？

誰かに話せるわけでもなく、独り言をぶつぶつ言う気にもなれず、地味にパニクるあたしの耳に、かさりと小さな音が聞こえてきた。

音のした方に目をやれば、今までそこにはなかった筈の紙切れが一枚。

立ちあがろうとすれば、くらりと一瞬目眩がしたけれど、構わず紙切れに向かって足を進める。　指でつまみあげれば、真っ新な紙の真ん中にメッセージ。

『驚きましたか？うららさん』

「あの、くそ河童！」

ぐしゃり！と手の平で紙切れを握りつぶし、あたしは怒声を上げる。

その筆記体には見覚えがあったし、あたしのことをさんづけで呼ぶのにも心当たりはひとりしかいない。　何より、こういう、とんでもなく非常識で、迷惑で、空気をまったく読まないことをしでかすのは、あたしの平凡な毎日を突然にかき乱しまくるのは、あたしの少ない人生経験上、ひとりしか心当たりがいないのだ。　そして、どこのギネス記録を狙っているのか知らないが、この、半ば倦怠感を持ちつつ現れる悪い予想を裏切らないのも、ひとりしかいない。

ああ、もう！

久しき再会は、自己紹介から（前書き）

ついったを始めました。三条司名義ですので、興味のある方は、検索してみてくださいませ。
それでもって、お気軽にフォローしてくださいー。
さて、第二話。
たぶん皆さんもお忘れの、あのひとたちの登場です。

久しき再会は、自己紹介から

ああ、もう！

と、一旦は怒髪天を衝いたあたしだったんだけど、こんなだだっ広い場所で、しかも完全に一人で、ぷりぷり怒っているのも虚しいので、早々に諦めを付けた。

そう。　普通に考えれば、ここへ行き着くはずだったのだ。　こんなありえない状況に、真正面からぶつかるなんて、馬鹿げてる。　普通に散歩に出かけた直後、記憶が飛ぶなんて、しかも気付けば見知らぬ場所に寝っ転がっているなんて、ありえない。　絶対にありえない。　最近、そういうアリエナイことばっかりに遭遇しているから、ちょっとテンパると、それが普通のひとにとってはやっぱり『ありえない』ということを忘れそうになる。

「僕は、うららさんのためなら、何だって可能にしてみせます」

いつだったか、彼はそう言った。　バックに花びらを撒き散らしそうに美しい笑顔で。

「じゃあ、今すぐに象に支えられていた世界に戻して下さい」

真顔でそう返してみたら、完璧な笑顔のまま凍り付かれた。　その後、まったくのノーリアクションで硬直しっぱなしなので、渋々、

「冗談ですってば」

「うららさんたら……。　お茶目さんですねえ。　どうやったら象の遺伝子に異変を起こさせて、世界を支えられる大きさにしたも

のかと考え込んじゃったじゃないですかぁ」
「不可能ですよ、元々」
どうにも夢見がちになれないあたしがそう言えば、彼は、目を細めて囁く。
「うららさんのためだったら、何だって可能にしてみせますよ？」
あたしは遠い目になりながら、手の平でくしゃくしゃに丸まった紙切れに指を這わせた。
「だからって、普通の日々をありえないことだらけにしなくても良いじゃないですかっ！」
ああ、もう。　この不平不満を誰にぶつければ良いというのだ。
紙切れが現れた以外は、未だに静まり返った部屋の真ん中に立ち尽くして、あたしは、平凡な日々を非凡というよりも烏白馬角な日々に変えてしまう、恐ろしい彼の、お節介としか例えようのない感情が宙を舞っているような錯覚に苦しんでいた。
「出島さんたら……」
思わずそう口にした瞬間、大きな音が四方八方からし始めて、あたしは肩をびくりと震わせた。　壁が、少しずつだけどスライドしている気がする。
ここ、何？　洋風忍者屋敷？
ぎしぎしと、音を立てながら、壁が確かにスライドしている。

それに伴って、光が差し込むようになってきた。　どうやら、窓が隠されていたらしい。　今までの部屋が真っ暗だったわけではないけれど、どうやら天井の方から漏れる自然光だけで照らされていたらしいので、窓から差し込む光はあたしには少し眩しかった。
　ようやっと壁のきしむ音が止んで、念のため暫く待ってから、あたしはそっと壁の一面に近付いてみた。　壁に指を触れてみようかと、手を伸ばしたとき、またしてもかさりと紙切れの落ちた音がする。　あたしから見て右側。　さっき紙切れが落ちて来た場所とは異なるところ。
　とりあえず、壁に触ってみるのは後回しにして、あたしは紙切れの方へと足を進める。
　少し屈んでそれを拾い上げようとした、まさにその時。

　ばっしゃーん。

　コントもかくや、という音を立てて、あたしの真上から水が降り注いできた。　それはターゲットであったらしいあたしをがっちりと捕らえて、あたしはものの数秒で全身濡れ鼠になってしまう。

「は？」

　ついつい、苛立ちが露わになった声を上げたあたしの足元には、まだ拾えていない紙切れ。　怒りに任せてむんずと掴み上げ、くるりと反対側を見ると、今の水でインクが落ち始めて若干脅迫状めいた雰囲気になったメモ。

『新しいお洋服が必要みたいですね？　うららさん』

「誰のせいよ」

一枚目と同じく、ぐしゃりとその腹立たしい内容の紙切れを握りつぶして、あたしは途方に暮れた。　前髪からぽたぽたとしたたり落ちる雫のせいで視界は悪いし、仕方なしに雫に遮られずに見られる下を向けば、足元に出来上がった水たまりにげっそりと落ち込みそうになる。

壁がスライドして出来た窓は、しかし、どう贔屓目に見てもあたしが通り抜けられるほどの大きさではなく、つまり、あたしの状況は悪化しただけということになる。

「おい」
「おーい」

ふと、目の前の窓的な細いところから声がして、あたしはずぶ濡れの髪から雫を撒き散らしながら顔を上げた。

「あ」
「あ」

無感情というよりも無気力なその声は、何故か聞き覚えがある。

「こっち」
「こっちこっち」
「いや、こっちこっちって言われても」
「こっち？」
「あっち？」
「そういうことじゃないってば。　こっちがどっちの方向かは分かってるわよ。　でも、そっちって言われたからって、意味が分からないからどうしようもないじゃない？」
「来い」
「来い」

「だーかーらー！　来いって言われても、そんな薄っぺらい隙間に、あたしがはまれるわけないでしょう？」

聞き覚えがあるばかりか、こういう押し問答のような会話を前にもしたようなことがある気がする。　もやもやは消えないばかりだったけど、とりあえず、あたしはその声の主たちと会話を続けることにした。　独り言をぶつぶつ言うよりかは、ずっとこちらの方が健全的だから。

「太ったのか？」
「でぶなのか？」
「余計なお世話！　あたしがスーパーモデルだったとしても、その隙間にははまらないんだから」
「広げる？」
「広げよっか」

理解出来ない提案のあと、隙間のような窓からにゅっと指が伸びてきた。

「怖っ！」

あたしのリアクションには完全無視を決め込んで、現れた指は、窓の左右の壁にがっちりと手を添えると、

「ふん！」
「ふぬ！」

パンダの全力疾走くらいだらだらした声をかけると、壁が動き始めた。　さっきと同じような音がし始める。

も、もしかして、さっきのもこの声のひとたちが？　だとしたら、何と言う馬鹿力。

ん？

無気力。　馬鹿力。　噛み合わない会話。

このキーワード、どっかで……。

あたしが記憶の隅っこをつついている間に、壁は先程よりも広く開いて、隙間程度だった窓は、しっかりと窓の姿をこちらに見せていた。　全ての壁が動いたみたいで、窓という窓から光がこぼれている。飴色の床にたまった水たまりが、きらきらとその光を反射して、一瞬だけ、このあり得ない状況を忘れかけたあたしは、ぶんぶんと首を左右に振って現実へと思考を戻した。

危ない、危ない。　これに慣れてしまったら、あたし、終わりだわ！

「ぶんぶん」

「ぶんぶん」

「水が」

「ぶんぶん」

「あ、ごめんなさい、かかっちゃった？」

窓をこちら側に向けて開き、声の主が入ってきたらしい。　急に近くなったその声に、あたしは慌てて謝った。　そういえば、あたし、ずぶ濡れなんだったっけ。

「ひさしぶりー」

「おひさー」

「久しぶり？」

ぺたりとおでこに貼り付いた前髪をかき上げて、あたしが視線を

前方にやると、そこには確かに見知った顔が。　しかし、それは決して煌びやかな思い出では、ない。

「う、うわわわ。え、猿人種の！」
「やー」
「やーん」

相変わらずドルビーサウンドのように喋る猿人種のふたりは、かつてあたしを亡き者にしようとした、頭の弱い河童たちである。あたしから見て右側の方は左手を、左側のは右手をひらひらりと振っていて、その左右対称な動きは、何やら不思議動物を彷彿とさせる。

「な、何してるの」

あのときは、事情がまったく違っているわけだけど、それでも身構えずにはいられない。　そもそも、ノリで人間ひとりを亡き者にしようとかいう発想が出てくる時点で、かなり危ないひとたちだと思う。

「えっと」
「え、えっと」
「え、忘れたとか？」
「ううん」
「忘れてないよ」
「でも」
「うん、でも」
「でも、何？」
「お前……」
「巫女……」

頭上でひらひらさせていた手をこちらに指さして、ふたりが仲良くハモった。

「誰？」

「え、誰って。　どういうこと？　今、巫女だって言ってなかった？」

「そうそう、巫女」

「でも、それは知ってるよ」

「前から知ってる」

「でも、それはお前の名前じゃないんだろ？」

「もしかして、あたしの名前を聞いているの？」

そしてまたしても、完璧なハモり。

「うん」

これでため息をつかずにおられようか。　あたしはがっくりと肩を落として、長く息を吐いた。　疲れる。　出島さんとは別の意味で、疲れる。

「うららら。　黄本うららです」

「うららら」

「うららー」

にぱーと微笑む猿人種は、意外と可愛かった。　そういえば、前に会ったときは、完全に敵だったから、こんな風に顔をまじまじと見るなんてこと、なかったかも。

あたしの右側に立っている方が、ふにゃんと手を差し出した。
握手のつもりらしい。

「桃城花梨（ももきかりん）」

どんぐりみたいにまん丸の瞳は、一見すると焦げ茶なんだけど、よくよく見れば深い緑色をしていると気付く。　少し丸みを帯びた鼻に、猫のように口角の上がった口。　首を傾げれば、癖毛が揺れる。

反対方向から、反対側の手を求めて手が差し出される。

「辻乃井馨（つじのいかおる）」

驚くほどに長い睫毛に縁取られた目は、こちらもまん丸。　色は、えっと、こういうの何て言うんだったっけ？　オッドアイ？　右目が深緑なのに、左目は焦げ茶色。　不思議。　桃城さんよりも低い鼻は、でもやっぱりにゃんこ口に繋がってる。　こちらも、へろへろと左右に揺れれば、つられて癖毛が揺れる。

「ひさしぶり、うららー」
「ひさしぶり、うららー」
「お、お久しぶりです……」

まるで旧知の友との再会を喜ぶかのようなふたりの笑顔に反して、あたしは引き攣った笑顔を浮かべた。　左右から握られた両手をぶんぶんと振られて、微妙に二の腕が痛い。

忘れてるかもしれないけど、あなたたち、あたしのこと、殺そうとしたことあるんだからねっ！

というのは、言わないのが正解かもしれない。

羞恥プレイはおきらい？（前書き）

少し時間が空いてしまいました。
三話目です。
フライング登場ですよ、あのひとが……。

羞恥プレイはおきらい？

名字にさん付けで呼ぼうとしたら、にゃんこ口を思いっきり歪めて、口をそろえて「えー」と言われた。　口数が少ないのが、語彙が少ないのか、定かではないけれども、それはどうやら不服を示しているのだと思って、あたしなりに譲歩した結果、名前にさん付けを提案してみる。　すると、またしてもにゃんこ口を尖らせて、鼻の頭に皺を寄せる。　ちょうど、ねこがあくびをしたときみたいな皺の寄り方に、このひとたち、河童なんかじゃなくて猫なんじゃないだろうか、なんてことに気がいってしまう。

「うららは、うららじゃん？」
「うららのこと、うららって呼ぶじゃん？」
「は、はあ。　そうみたいですね」

あたしは、うららって呼んでね☆なんてことを言った覚えはないのだが。

「だから、花梨」
「だから、馨」
「えっと、今の非常に少ない単語から、無理矢理要約すると、あなたたちはあたしのことを名前で呼び捨てにしているから、あたしもあなたたちのことを名前で呼べと？」

何故だろう。こめかみのあたりがじんじんする。　おかしいな。
あたし、偏頭痛持ちなんかではないのに、ここ数ヶ月、頭痛を感じる日が増えた気がする。

控え目に眉根を寄せて、くらくらする頭に耐えているあたしには

まったく意を介さず、猿人種河童のふたりは、にゃんこ口の口角を更に上げて、にぱーとしか形容出来そうにない笑みを浮かべた。
ああ、こんなに頭弱いのに笑顔は可愛いとか、何だか反則だわ。

「うららー！」
「うららー！」

何故かあたしの名前を連呼して、猿人種はあたしの周りをくるくると回り始める。　その足元は軽やかで、よおく見れば、何かダンスめいたものに見えなくもない。

「いやあの、テンションあがっちゃったところ悪いんですけど、あたし、そういうノリ、苦手なんで」

こういうタイプには、言いたいこと言っちゃった方が、後々楽なのだ。　ということを、某出島さんという変態で学んだあたしである。

もちろん、あたしの言うことなどお構いなしなふたりは、そのまま、くるくるとあたしの周りを回り続けた。　無視して前進しようとすると、ふたりは器用に回ったまま前進する。　台風の目か何かのように、あたしを中心として、非常にからみづらいふたりの電波さんをはべらせて、どこへ行くのか皆目見当もつかないまま、あたしは長い廊下を歩き続けた。

閉じ込められていた部屋を出れば、部屋ほどではないものの、高い天井に、先が見えないほどに長く続く飴色の床に彩られた廊下に出たあたしは、頼りにならないガイドと一緒に歩き始めたのだった。

まだずぶ濡れになったままの服は乾く気配もなく、そろそろ身体

も冷えてきた。　歩く度に、濡れた靴下が不快な音を立てて、靴の中で暴れる。　ぺしょんこぺしょんこと、情けないペンギンみたいな足音を立て、完全にハイになってしまった河童を周りに回らせて、あたし、今気付いたんだけど、ちょっとおかしなひとじゃない？

一応誰も見ていないとはいえ、一体いつまでこの羞恥プレイが続くんだろう、なんて絶望しかけたところ、廊下の両側にある扉のひとつが音を上げて開いた。　かちり、とドアノブが回って、重厚な扉が廊下の方へ向かって開く。　その扉までは、まだ距離はあったけれど、そこから顔を出したその姿に、あたしは見覚えがあった。

「…え？」

くるくる回り続ける河童の肩に手を置いて、その妙なダンスを止めさせると、あたしは目を見開いて笑顔になった。

「岡崎！」
「よー。　遅いよ、黄本」
「え、え、何してんの？　岡崎も拉致されたの？」

拉致されたなんて記憶はどこにもないのだが、出島さんが関与してて、目覚めたときに頭が痛くて、久しく顔を合わしたことのない猿人種がなぜかあたしの前に現れて、思わせぶりなメモが天井から落とされて、そして、ここへきて岡崎がいるとなると、それ以外の選択肢はないように思われる。

「はは。　拉致ね。　まあ、そんなとこだな。　おれがここにいるのは、お前がここにいるからなんだけど」
「意味分かんない。　あ、嘘。　分かった。　あたしの巻き添えくったのね？」

「あれ？　覚えてないんだ、黄本は」
「何を」
同情の瞳を向けたあたしに、岡崎は屈託なく笑った顔を崩さない。
たまに思う。　岡崎って、意外と人間出来てるなって。
「おれ、お前と一緒にいたんだよ。　お前が拉致？されたとき」
「え、そうなの？」
これには、あたしも素直に驚いた。　でも、そういわれてみれば、そんなだったような来もする。　そうか、散歩に出ようとして、その途中で偶然岡崎に会ったんだ。　特に目的もなく歩いていたわけだから、散歩がてら、話し相手が欲しくて、岡崎が自ら相手になろうかと言ってくれたんだった。　そして、その後ふたりとも拉致られたわけか……。　ほんと、岡崎ってば災難よね。
「つーかさ、黄本。　お前、それ、何？」
それ、と岡崎が指さしたのは、あたしを軸にして、円を描き続いている猿人種のことだ。
「ああ、えっとね。　あたしも、いまいち現状を把握しきれてはいないんだけど……。　出島さんの元敵で、河童の、桃城花梨と辻乃井馨です」
「河童？　出島さんと同じってこと？」
「うーん、いや、厳密に言うと違うんだけど」
「どう違うの？」
「関東人と関西人的な違い？」
「ああ、なるほど」

吹き出すのを堪えもせずに、岡崎が興味津々な瞳を河童たちに向ける。

「じゃ、黄本はこっち」

あたしよりも随分と日焼けした岡崎が、扉の中を指し示す。　顔だけを部屋の中へ突っ込むと、目に入ってきたのは、煌びやかな家具と、それ以上に煌びやかなおびただしい服の数々。　服だけじゃない。　靴に、アクセサリー。　しかも、それのどれもが、お伽噺に出てくるお姫様が着るようなものばかり。

「ちょ、ちょっと待って……。　岡崎……」

「ん？」

「元凶は、十中八九出島さんだから、そこは良いとして、お、岡崎はどうしてここにいるの？」

「ああ……」

うろたえるあたしに、合点がいったという頷きを返して、岡崎がばつが悪そうに苦笑いをした。

よくない！　それ、よくない兆候なんですけど！

「いや、その……。　おれも、全部はちゃんと聞いていないんだけどさ。　とりあえず、おれはここで待ってろって。　で、お前が、誰かにエスコートされてここに来るから、この部屋に案内して、着替えが完了するまで、扉の外で見張ってろってさ。　それさえ済んだら、おれは帰れる、らしいよ？」

「ひどい！　あたしを売るつもりなの、岡崎！」

「売るって……。　着替え中に、誰も入らないように見張り役任せられただけじゃん」

「だって！　見てよ、あの服！　あんな、きらきらびらびらしたの。　あ、あんな、ふりふりでぶりぶりなの。　あんなの、あんなの、何の羞恥プレイなのって思わないの？」

あたしだって女の子なのだから、ああいうザ！女の子ってな服に憧れがないわけじゃない。　でも、恥ずかしい。　恥ずかしすぎて、拒否反応が出る。　アレルギー反応が出る。　あの中に閉じ込められて、服を選ぶ自分を想像するだけで、顔から火を吹いて、この屋敷みたいな場所を全焼してしまいそう。　だって、考えてもみて？　たった一着、ドレスが用意されているだけならまだしも、何着もあるんだよ？　服も、靴も、アクセサリーも！　ということは、どれを選ぶかはあたし次第なわけで、ということは、どれを身に纏っても、それはあたしが選んだということになるわけで、そうなったら、何を着ていても何を身に纏ってしても、岡崎やら猿人種やらから、へー黄本うららはそういうのが好きなのか、なんて思われる。　恥ずかしすぎる。　だったらいっそのこと、このずぶ濡れになったカジュアルすぎるほどカジュアルな服で、身体の芯から冷え切って風邪をひいてしまいたい。

「絶対やだ」

情けない声をあげて、あたしが両手で顔を覆うと、岡崎がぷっと吹き出した。

「なに」

「いや、黄本、面白いなって」

「面白い？　あたしは全然面白くないんですけどっ」

「そりゃそうだろうけどさ。　おれ、女の服なんて全然分かんないけどさ。　似合うんじゃないの？って思ってたから。　黄本に。　だから、何が恥ずかしいのか、よく分かんないや」

「岡崎……」

眉を八の字にして、あたしは岡崎の牧歌的な笑みを見つめる。岡崎も、あたしから目を逸らさずに、終始にこにこしている。

恥ずかしいのが分からないのは、岡崎が鈍すぎる男だからよ。女子高生の微妙な心理も分からないで、似合うんじゃないの？なんて軽口、よく叩けるわよね。　デリカシーってものに欠けてるんじゃないの？

なんて内容のことを言おうと、息を静かに吸った。　のに。

「だだだだだだ、駄目です～～～～～～～～！！！！」

地震？それとも、雪崩？と、頭の中にお花が咲いているような猿人種のふたりでさえ、奇妙なダンスを止めて何事かときょろきょろし始める。　かくいうあたしも、鼓膜を震わせるほどの大声に、びくりと肩を上げて、上半身を両腕で抱き締めた。

「ううう、うう、う、うう、うう、うららさーん！」

諸悪の根源、もとい、世界の害毒、もとい、乙女を裏切る変態イケメン、出島さんがこちらに猛スピードで近付いてくる。　走っているのだろうが、その両腕は、ゴールテープを切る陸上選手かグリコランナーかという程の、完璧な万歳体勢になっていて、そのまま鼻水だか涙だかをちょちょぎらせて走ってくる出島さんの姿は、テロリストも裸足で逃げ出しそうな迫力である。

「うららしゃん！」

すでに涙声すぎて、呂律の怪しい出島さんは、走ってきたそのスピードのままにあたしをがばおう！と抱き締める。　まったくもってロマンチックではないこの抱擁は、しかし、あたしにとっては逆に好都合。　出島さんの「愛情表現」とやらは、素直に受け取るにはあまりにもハードルが高い。　肋骨が、抱き締められてきしきし言いそうなあたしには気付かず、出島さんは岡崎に首を向けると、

「めっ！」

と半泣きの声で言った。　どうやら、威嚇のつもりらしい。　大層怖い威嚇もあるものだ。

「うう、うららさん……。　大丈夫ですか？　岡崎さんという皮をかぶった狼に、手籠めにされませんでしたか？」

「は？　意味が分かりません。　されるわけないじゃないですか、岡崎はあたしの友達ですよ？　むしろあたしは、今出島さんの馬鹿力で抱き締められているせいで、いつ肋骨が破裂して命を落としてしまうんじゃないかとひやひやしているところです」

「だだだ、だって、うららさんたら、岡崎さんと見つめ合ってにやにやしていたじゃないですかっ」

「にやにやじゃありません。にこにこです」

「あああ、でも、見つめ合っていたのは事実だと認められるのですね！」

「誰のせいだと思っているんですかっ！」

そもそも、出島さんが岡崎まで拉致してくるから。　そもそも、出島さんがあんな部屋にあたしを閉じ込めるから。　そもそも、出島さんが、あんなこっ恥ずかしい服を着ろとかいうから！

少し声を荒げると、押しつぶされた肺から酸素が抜けていく。

けほんと小さく咳をしたら、出島さんは腕の力を少しゆるめてくれた。　ほっと息をつくあたしを、出島さんが穴があくほどに見つめてくる。　岡崎のさっきの視線なんて、ハムスターのそれ。　出島さんのは、何て言うの？　は虫類のねちっこさがあると思う。

「あの……」

とんとんと、控え目に出島さんの肩を叩いて、岡崎が言う。

「出島さん、黄本に会うのは、最後の最後にするんじゃなかったんですか？」

出島さんは、岡崎とあたしとを交互に見比べ、涙でぐしゃぐしゃになって上気した顔を、一瞬で氷点下までもっていくと、高い天井を仰いで叫んだ。

「不覚！」

恐怖のポジティブ・シンキング（前書き）

前話でフライング登場をかましてしまった出島さん。実は、彼が登場するのは、最終話の前の話になる予定でした。でも、空気を読まない登場すら好意的に受け入れてもらっているようなので、よしとしましょうか……（笑）。

そのせいで、話が長引きそうです。しかも、他のキャラクターたちの登場がどんどん遅れていっています……。出島さん、君ってひとは。

恐怖のポジティブ・シンキング

「うらら」

とんとん、とあたしの肩を指でつついて猿人種が言う。　片目が深緑のオッドアイだから、こっちが馨さん。　どうでも良いんだが、猿人種の怪力はこういった何気ない仕草にも存分に発揮されるらしく、とんとん、と叩かれた筈の肩が、じんじんと鈍痛を放っている。

地味に痛い。

「うらら」

とんとん、と反対の肩をもう一人の猿人種、花梨さんが叩く。

これであたしの両肩は、同じくらいの痛みを伴うことになった。

あれだよね。　左右対称の動きをすると、骨盤のゆがみやら何やらが改善されるっていう……。　そんなわけない。　痛い。　地味に、でも割と痛い。

「な、何ですか」

「ぶー！」

「ぶー！」

鼻の頭に皺を作って、猿人種が抗議の声と思われる奇声をあげた。

ああもう。河童っていうのは、何でみんながみんな変人なんだ。

それとも、あたしは特に変なのに出逢ってしまっているだけ？

だとしたら、どれだけ運が悪いの、あたし！

「何が不満なんですか」

「ですか！」

「のー！」
「は？」
「ですか」
「のー！」
「いや、さっぱり意味が分からない。　ていうか、ちょっとで良いので、単語繋げて文章を喋る努力をしてみてください」

「うららの」
「うららの」

こんな筈じゃなかった、一生の不覚、などといった独り言を繰り返し、おうおうと嗚咽を隠そうともせず、膝をついたその周りに涙で出来た水たまりを作りつつある出島さんの鬱陶しさにすでに少しいらついていたあたしは、猿人種にも冷たい言葉を投げかけた。
すると、ふたりはまん丸い瞳を更にまん丸くさせて、どこぞの双子タレントもびっくりなシンクロ率で、

「他人行儀！」

と叫んできた。

「漢字、使えるんだ」

率直な感想を言えば、何故か誇らしげに胸を張る。　褒めてないよ？

「どうしてあたしが他人行儀なのよ」
「でも、良い」

尋ねれば、笑顔でそう言われる。　意味が分からない。　何でこ

んなに意味不明なんだ、猿人種。

「はあ？　何で？」
「もう、終わったから」
「終わった??　何が？」

理不尽すぎる会話の流れに、あたしのいらいらメーターがぐんぐん上昇する。　そこへ、岡崎が口を挟み込んできた。

「黄本？　たぶん、あれだ。　さっきまで、ですます調で喋ってたのが他人行儀だって言いたいんだと思う」
「あ。　なるほど」

急に合点がいく。　なるほどね。　それで他人行儀、か。　それは一理あるかもしれない。　でも、あたしに言わせてみれば、前回会ったときは「殺す！」とか言われていた人外のひとに再会した五分後に、タメ語の呼び捨てで会話をすることの方が、余程ぶっ飛んでいるんだけど。　まあ、そういった常識的な意見は、あのふたりには通用しないっぽいか。

「うらら」
「うらら！」

非常識な二人組は、あたしの名前を親しげに連呼する。　岡崎の方からふたりの方へ目を向ければ、二人は、水たまりの中心で悲嘆にくれている出島さんを指さし、

「こいつ」
「ばか」
「だまらっしゃい！」

猿人種の挑発にいとも簡単に乗ってしまった出島さんが、涙をちょちょぎらせながら顔を上げる。　一連のことが可笑しくて、あたしは思わず吹き出してしまった。

「は！！！！！」

うざいまでに地獄耳な出島さんは、当然の如くそれに反応し、光の速さであたしの目の前に移動、そしてがっしりと両手をつかむ。

痛い。

「うららさん！　今、笑いました？　僕の不幸を笑いました？　笑いましたか？　この、頭すっからかんな猿人種と一緒に、僕のことを嘲り笑いましたか？」

「どんだけ被害妄想が激しいんですか」

「妄想じゃないとおっしゃる！　つまり、事実なのですね！　のーう！」

「ひとの言葉をねじ曲げない！」

「わーん、うららさんが怒ったー！」

ちょっと声を荒げれば、出島さんはその長身を二つに折り曲げて、またしてもおうおう言い出す。　そこへ、出島さんの周りに円を描くようにぐるぐる歩きながら、猿人種のふたりは、

「やーいやーい」

「怒られたー」

「うららに怒られた」

「うららに嫌われた」

と追い打ちをかける。　そして、それに対して、過去から何も学ば

ないのが信条らしい出島さんは、

「だまらっしゃい！」

と、ふたりを追いかけ始める。

「なに、これ。　コント？」

あたしの心からのコメントに、岡崎は苦笑しつつも頷いてくれる。

「まあまあ。　平和だってことだよ」

「そうかなあ……」

あたしは、岡崎のように人が良くないから、そんな風には思えない。　すぐに、嫌なことばっかり考えちゃうし。　今だって、すんごく久しぶりに出島さんに会えたっていうのに、あたしってば何て可愛くないんだろう。　きっと、出島さんだって、あたしにもっと可愛らしくなって欲しいんじゃないのかな。　素直になろうって、何度も自分に言い聞かせて誓って、でもちっとも進歩のないあたしのこと、出島さんはのろまだって思っているんだろうな。

思考に集中していて、目の前のことには注意を払っていなかったあたしは、猿人種のタックルで現実に引き戻される。　あたしの腰の両側に、猿人種がぶらりとくっついていて、それはあたしの背後に隠れるようにしつつ、顔だけを左右からのぞかせている。

「うららら」

「守れ」

「いや、守れって。　守る義理ないし」

「黄本。　お前って、たまにすげえシビアだよな」

「え、そう？」

なんて会話の直後に、唇を尖らせたアヒル口の出島さんが、あたしの前に立ちはだかる。　もどかしい思いを表すためにか、出島さんは両足でじたばたとその場で地団駄を踏んだ。　昭和の子供か、というツッコミを入れたくなる。

「ひ、卑怯ですよ、この猿河童！　うららさんを盾に取るとは、どこまで品性下劣な真似をすれば気が済むんですかっ」

「うるさい」

「水ようかん河童」

「何ですって！　僕が水ようかん河童なら、貴方たちなんて、貴方たちなんて、チョコバナナ河童ですっ！　この、スイーツ河童！」

「ふふ」

だめだ。　笑わないでおこうと思ったのに。　だって、あんまりにも低レベルなんだもの、この言い争い。

「え？　今、うららさん、僕のウィットに富んだ言葉使いに笑ってくれました？」

「いや、低レベルだなって」

「でも、笑ってくださったんですよね？」

有無を言わさない笑顔で、出島さんがあたしとの距離をぐぐんと縮める。　周りに岡崎もいるっていうのに、出島さんは、もう少しで肌がくっつくんじゃないかというほど顔を近づけて、その矢鱈とまぶしい笑顔を振りまいた。

「嬉しいなあ」

ああ、出島さんって、やっぱりずるい。

「そ、それより、出島さん」

顔の表面温度が上昇するのを感じ取って、あたしは、わざとらしいのもお構いなしに話を変えようとする。

「どういうことなんですか、これ？」

「何がですか？」

きょとん、と無垢な瞳をこちらに向ける出島さん。　前言撤回。殴ってやりたいくらい腹が立つ。　どう考えても主犯なくせに。

「こ、れ。　何であたし、あんな部屋に拉致されてたんですか？　何で天井から水が降ってくるんですか。　何で岡崎まで拉致られてるんですか。　何なんですか、あの衣装部屋は！」

「あ、やっぱり、多すぎましたか？　ドレス」

「は？」

あたしの両手は離そうともせず、顔だけを半開きになった部屋へと向ける。　端正な横顔に、美しいとしか形容できない顎のラインに、触ってみたくなる喉仏に、あたしは不覚にも目を奪われる。

「うららさん？」

「え？　……あ、だ、だから！　あのドレスたちはなんなのかって」

「もちろん、うららさんのためのものですよ。　でなきゃ、何で僕が他のどうでも良い女性のためにドレスなんぞを選ばなくてはいけないのです？」

「そういうことじゃ、なくて」
「本当はね、もう少し厳選するつもりだったんですよー。　でも、あれも似合うなー、これも良いなあ、これを着たうららさんも見たいなあ、あれもきっとうららさんが着たら卒倒ものだろうなあ、なんて思って選んでいたら、あんな量になってしまいました」
「だから、そういう、」
「ああ！　そうですよね！　選べないですよね、多すぎて！」
「違う、そうじゃなくて」
「そうか！　そうですよ！」
「何が？」
「確かに、僕は最後の最後まで、うららさんに会うのを待つつもりではありましたけど、ここで出現して正解ですよ、僕。　ね？」
「いや、意味が……」
「だって、僕が直々にうららさんのお着替えを手伝ってあげられるんですもーん！」
「え、ええ！」

恐怖に戦くあたしとは裏腹に、出島さんの頭の周りにはピンク色したアホ面のプチ出島さんが天使の姿で笛を高らかに鳴らしている。
違う。　そういう展開になるはずでは。

「そうですよねえ。　僕ってば、なんてうっかりさんなんでしょう。　うららさんのお着替えなんてビッグイベントを、岡崎さんに頼んでしまうだなんて。　だって、あれですもんね。　岡崎さんは見張るだけですけど、僕だったら、一緒に中に入れますもんね！」
「……！！」

先程の恐怖を軽く百倍は上回る衝撃が、あたしを襲う。　パニック状態に陥って、言葉を紡げないあたしをよそに、出島さんはますます、その両手に力を込めた。　嫌だ。　相変わらずぬるぬるして

る。　そして、地味に痛い。　いや、そんなことは、既に些末な問題。

「出島さん！」

ようやっと口を開いたときには、時、すでに遅し。

「さあ！　参りましょう！」

朗らかにも聞こえる声音で宣言すると、出島さんは軽くあたしを抱き上げる。

「いやーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！」

あたしの悲鳴だけが、廊下に響き渡った。

再会は、静寂の中で（前書き）

らっぷらぶであっまあまな感じを目指してみました。
悶えていただければ、これ幸い。

再会は、静寂の中で

非情な音を立てて、重厚な扉が閉ざされる。　外界と遮断された、密閉空間。　逃げ道なしの、閉鎖空間。　いきはよいよい、かえりはこわい……。

聖人君子のごとき常識人な岡崎と、頭はいっちゃってるけど今のところ害はなさそうな猿人種のふたりを廊下に置き去りにして、出島さんは意気揚々と彼らに手を振った。

「じゃあ、うららさんと僕が出てくるまで、そこで大人しくしていてくださいね」

「あ、は、はあ……」

あたしの怯えた瞳を気にかけて、煮え切らない反応な岡崎と、

「ぶー！」

「ぶー！」

「ようかんのくせに！」

「生意気だぞー！」

全く、事の重大さを把握していない猿人種の脳天気な文句が、出島さんに抱きかかえられたあたしにの耳に届く。

「さて！」

それも束の間のこと。　出島さんは、颯爽と洋服だらけの部屋に足を踏み入れると、ずんずんと迷いのない歩みで部屋の中央に鎮座した豪奢なベッドに向かった。　ところ狭しと置かれたベッドの上

のドレスを片手で左右にかき分けると、もう片方の腕で支えているあたしをそっと座らせる。

どんな変態行為が始まるのかと思って身構えていたら、出島さんは何故か言葉もなく、その場に膝をついた。

ふかふかの布団の上に、びしょびしょの服を着て座っているあたしの目の前に、出島さんの顔がある。　長身の出島さんとはいえ、元々高い位置にあるベッドに座っているあたしからは、出島さんの顔が少しだけ見下ろせる。　新鮮な位置だ。　いつもは、出島さんを見上げるばっかりだから、あたし。

ほんの少しだけ、眉根が寄っていたかもしれない。　でも、にこにこしたまま、それ以上近寄って来ようとしない出島さんを見て、徐々に安心してくる。

なんだろう。矛盾してるのかもしれないけど。

出島さんって、あんなに突飛でおかしげな言動をするのに、こうやってとても静かになるときがある。　初めは、出島さんって、無理してテンション上げてるのかな？なんて思ったんだけど、でも、もしそうだとしたら、ほぼいつもあのテンションなのはおかしいし。だから最近は、出島さんって、振り幅の大きいひとなのかな、と思うことにしている。

す、ととても滑らかな動きで、出島さんの腕が動いた。　その先にある長い指が、新雪に触れる繊細さであたしの膝に置かれる。電流が走ったような衝撃がして、あたしの心臓は、たちまち鼓動を早めてしまう。　必死でその場から動かないでいるのが、今のあたしの精一杯。

ああ、もう。　こんなに静かな空間で、こんなに近い距離なら、出島さんにこの鼓動が聞こえてしまってもおかしくないというのに。
恥ずかしい。

穏やかすぎるほどに穏やかなアーモンド形の瞳はあたしに向けたまま、出島さんが微かに首を傾げて目を細めた。

ああ、もう！　それがどれだけ魅力的な仕草なのか、分かっていてやっているのか！　見慣れても良い筈のその整った顔立ちに、それでもあたしは翻弄されてしまう。　心臓の音は大きくなるばかり。
そればかりか、頬が火照ったように感じる。　最悪だ、あたし。
恥ずかしすぎる！

「うららさん？」

形の良い口唇であたしの名前を紡ぐと、出島さんが膝に置いた手に力を入れて、あたしに近付いてくる。　もう片方の手の平が、真っ赤になっているであろう頬に添えられる。　今度こそ、あたしはびくりと身体を震わせた。

「おひさしぶりです」

さっきよりも小さな声で、さっきよりも耳に近い距離で、出島さんが囁く。

そう。　ひさしぶりなんだ。

出島さんの存在感が半端なく濃いだけであって、あたしは久しく出島さんに会っていなかった。

そう思ったら、何だか泣けてくる。

なんでだろう？

出島さんに会ってから、あたしはあたしのことが理解出来ないことが増えた。

ひさしぶりですね。

そう言いたいのに、口を開いたら、涙がこぼれてしまいそう。それが嫌で、あたしは耳元の出島さんの声に集中して、目を伏せた。

「ずーっと、会いたかったです」

優しい優しい声音で言ってから、ふっと息を吐く音がする。　それから、目を伏せたままのあたしの視界が、少しだけ暗くなる。緩慢な動きで顔を上げれば、頬に添えられた指が肌を撫で上げた。

そして、出島さんの口唇が、あたしのそれに重ねられる。

とても、静かに。　たった数秒が、とても長い時間に感じられる。柔らかく、緩やかに流れる数秒間、あたしの頭の中は動揺することもやめて、ただただ、出島さんから伝わってくる温もりを感じていた。

「ふふふー」

おでことおでこをくっつけて、出島さんが笑う。　ちかちかと緑色に光る瞳が、あたしのことを真っ直ぐに見つめている。

「な、なんですか」
「えへへー」
「だから、なんなんですか」
「やっぱり二人っきりになって正解でしたね」
「はあ？」
「だって、うららさんたら、もし僕が今と同じ事を岡崎さんの目の前でしようもんなら、問答無用で拒否されてたでしょう？」
「当たり前じゃないですか！」

何で、よりにもよって岡崎の前で恥ずかしいことをされなくちゃいけないのか！

「だから」
「え？」
「二人っきりになって正解です。　拒否される可能性を極限まで減らしたかったので」
「出島さんって、意外としたたかですよね」
「計算高くなりたいと思わせるほど、うららさんが魅力的なだけです」

こういうことを、さらりと言っちゃえる出島さんって、本当に反応に困る。　口を開きつつも、何も言えなくなったあたしの頬に音を立ててキスをすると、出島さんはそのままあたしのうなじに顔を埋めてしまう。　目の前にある出島さんの背中に手を回すべきか、とあたしが逡巡していると、

「はーん、うららさんって、たまんないですよねー」
「褒め言葉に聞こえないんですけど」
「僕はいつだって、最上級の褒め言葉しかうららさんには伝えられません！」

「そんなこと、自慢げに言われても……」
「うららさん？」
「なんですか？」
「大好きです！って、言いましたっけ？」
「えっと……」

言われてます。　ていうか、言われ慣れてます。　だって出島さん、口を開けばそればっかりですもんね。　というのは、割と真実に近いとは思うものの、それを言っちゃうとあたし、かなり感じ悪いひとじゃない？　だからって、言われたことないなんてのも言えないし。

「言った傍から、言葉が消えていくみたいです。　言葉でしか伝わらないこともたくさんあると思うんですけど、言葉じゃ足りないこともたくさんあるんですよね。　うららさん。　大好きです。言葉じゃ足りないくらい。　毎日言っても、毎秒言っても足りないくらい。　だーい好きです」
「あ、え、えっと……そ、その……」

ありがとうございます。

消え入る声で、しかも語尾を盛大に濁して言えば、出島さんはぎゅう！とあたしを抱き締める腕に力を込める。　あたしは、勇気を出して手を伸ばし、出島さんの背中をさすってみた。

「そういえば、あの脳みそ骨粗鬆症な猿人種ども、うららさんのことを呼び捨てにしてましたよね」
「へ？　あ、ああ、はい」
「あとで、焼き入れておきますね！」
「いや、そういうこと、明るい声で言われても。　しかもあたし、

気にしてないですし」
「うららさんは、心が広いのですね。　感激です」
「ていうか、出島さんの心が極端に狭いだけでは？」
「違いますよーう。　うららさんに近付く不定な輩に対して、死の制裁を与えてやりたいだけです」
「そっちの方がよっぽど物騒なんで、やめてください」
「えー」

久しぶりに会ったはずなのに、いつも通りすぎるほどいつも通りな出島さんとこうやって話していると、寂しいな、なんて思っていたことを忘れてしまう。

気付けば、笑顔になっていたあたしを、出島さんはまじまじと見つめる。

「かわいい」
「殴りますよ」

やーん、と乙女な声を出す出島さんに、またしても笑みがこぼれる。何だか、とても心が落ち着いている。今まで、すごーく頭を悩ましていたものが消えたような。

と、出島さんが爽やかに立ち上がると、青春映画みたいな笑顔をこちらに向けた。

「さて！お着替えタイムですよ！」
「変態め……」

出島さんが、極端に諦めの悪いひとだということを、すっかり忘れていた。　さて、どうやって切り抜けるか……。

お着替えにまつわる喜劇（前書き）

ぎゃー！忙しくしていたら、なんと1ヶ月も経っているではありませんか！

怖い！怖いよ！光陰矢のごとし過ぎて、怖いよ！

今回も、うらら譲と出島さんの、おばかでらぶらぶしたお話です。

お着替えにまつわる喜劇

あたしの目の前に、涙目の出島さんが仁王立ちしている。　すっくと背筋を伸ばし、長い脚の上に乗っかる、均整の取れた上半身、その更に上にある理想的なラインを描く首筋、そして頂点にあるのはスーパーモデルも裸足で逃げ出す小顔。　それが今、世にも情けないものとなって、あたしの目の前にある。

こういうのも、豚に真珠って言うのかしら。

冷静にそんなことを考えてしまうあたしは、薄情者なんだろうか。

「うう、えぐっ、な、何でですか」

世にも情けない顔の出島さんは、世にも惨めったらしく鼻をすすって言った。

「だから」

あたしも、これで何度目になるのだろうかと呆れつつも口を開く。いつのまにやら、あたしまで仁王立ちになっている。　もっともあたしの場合は、腰に手をやって少しばかり高圧的とも見える態度であるけれど。

「何度も言いますけど。　いやです」

「うららさんっ！」

何度も同じ事を聞かれて、その度に同じ答えを返しているはずなのに、出島さんのリアクションはサンタクロースのいないことを聞

かされた幼児のそれである。

「でも、どうしてですかあ」

「だからっ。　それも、何度も答えてますけど。いやだからです」

「どうしてですかっ。　僕ですよ、相手は？」

「だからこそ、余計にいやなんですってば！」

「僕以外に、誰がいますかっ」

「質問の意味を汲み取りかねますけど、出島さん以外のひとは、そういう変態なことを考えつかないものだと思います」

「嘘です！　そんなことはありません。　みんな、口には出さないだけど、同じようなことを考えているはずです！」

「じゃあ、出島さんのような変態と一般のひとの差は、口にするかどうかなのでは？」

「僕は、口にするだけではなくて、きちんと実行に移します！有言実行な男ですから！」

「変態な提案に限って有言実行なんですか？　はた迷惑にもほどがありますよ」

「とにかくー、良いじゃないですか、うららさんー」

仁王立ちだった出島さんは、ついに地団駄を踏み始めた。　文字通り、その場でばたばたを足を踏み鳴らすその姿は、少年の心を持った大人の間違った例として、文部省に写真提供されるべきだと思う。

「いやなものは、いやなんですってば！」

負けじと声を荒げると、出島さんはぴたりと動きを止める。　不気味な静けさが部屋中に広がる。　ここで不安になってしまっては相手の思う壺。　あたしは、精々平気な顔を決め込んでみせた。

「どうしてもですか？」

ぽつりと、さっきよりも数段情けない声で出島さんが呟く。　同情を買う作戦に出たらしい。　そうはいくか。

「どうしてもです」

なるたけ冷たく言い放てば、途端に出島さんの化けの皮がはがれ落ちる。

「いーやーでーすー！」

「いやなのは、こっちですってば！」

「どうしてですかー。　何がそんなに嫌なんですかー」

普通、それを聞く？　そんな分かりきった、常識云々以前の問題を、わざわざ口にする？

あまりに我が儘のすぎる出島さんを、睨み付けて、あたしは意識的に声を低くし、抑えた声音で、

「いきなり、衣装部屋とかいうのにほっぽり込まれて、逃げ出せないように外に人まで置いて、着替えなくてはいけない状況に無理矢理追い込んで、尚かつ、目の前で着替えろなんてことを思春期真っ盛りの女の子に要求してくる出島さんが変態でなかったら、ただのパワハラセクハラ親父ですよ」

「お、親父っ！？」

まったく想定していなかったらしい言葉に大打撃を受けたらしい出島さんは、いつものオーバーリアクションでもってして、よろよろとその場で八の字を足で描く。　そのショックを受けたにし

ては軽やかなステップが、逆にあたしの神経を逆撫でするとは知らずに。

「これが学校だったら、訴訟問題もんですよ」

「僕が校長なら、校則を変えてみせます」

きりりと真顔で言われると、出島さんのおつむのいかれ具合を心配せざるをえない。

「そういう頭の中がお花畑のひとは、そもそも校長職になんてつけないんじゃないでしょうか」

「そうですね。　僕の頭の中は、うららさんという麗しいお花でいっぱいですもんね」

「いや、別に上手いこと言って欲しいんじゃなくてですね？」

「えへへ、うららさんに褒められてしまいました」

「褒めてない」

言下に切り捨てたのに、出島さんはえへへと幸せそうに笑う。その屈託のない笑みを見ていると、怒っている自分が馬鹿らしくなる。　そもそも、あたしは怒るのが苦手なのだ。　だって、きりがないじゃない？　疲れるし。

というわけで、あたしが小さく、「もう」と言えば、出島さんの顔の中に埋め込まれていたらしい電球が省エネモードから蛍光灯モードに変わった。

「じゃ、じゃあ」

はあはあと荒い息をしながら、わきわきと胸の前で怪しく指を動かしてみせる出島さん。　どんな麻薬中毒者かと思われる据わった

目つきで、じりじりとあたしとの距離を縮めようと摺り足で近寄ってくる出島さん。　どこをどうみても、残念な美青年にしか見えない。　なまじ、容姿が整っているだけに、余計に気持ちが悪い。

「脱ぎませんよ。　着替えませんよ。　出島さんの見ている前では、絶対に！」

「えー」

アヒル口を残念悲鳴対応型にしてから、出島さんが天を仰ぐ。

「むう、矢張りうららさん。　一筋縄ではいきませんね。　いいえ、でも、それくらいが丁度良いのです。　貞操観念の弱いうららさんなど、うららさんではない！」

「貞操観念以前の問題だと思いますけど」

「うららさんが、そうやってご自分の身を守ろうと頑なになればなるほど、僕の情熱は燃え上がるのですから！」

「嫌がらせですか？」

「うららさんたら、小悪魔さんですねー」

「そういう出島さんは、救いようのない電波さんですよね。　たまに、どうやってここまで生きてこられたのかが不思議になります」

「それはもちろん、」

と、ここで出島さんはとびきりの笑顔を見せる。　例のあれだ。バックにお星様がきらんきらんして、こちらが無防備であるものなら一発K・Oをかませられてしまう、内容如何に関わらず王子様的な雰囲気をばりばり醸し出す、例の笑顔である。

「うららさんにお会いするために、今まで生きてきましたから。生きてて良かったです」

くらり。

ああ、なんたる不覚。　出島さんが変態なことも、出島さんが空気を読まないことも、出島さんが背筋が凍り付くほどのロマンチストだということも、出島さんが悔しいかな、異常に眉目秀麗なことも、全部全部知っていた筈だというのに。

あたしはあえなく、出島さんの殺人スマイルに硬直させられてしまう。

か、かわいい。

隙を見せると殺られるぞ、と危険信号が鳴り響く脳みそとは裏腹に、あたしはぼんやりと脳天気なことを思いつく。

「隙あり！です」

宣言するや否や、出島さんの両腕がさっと伸びる。　ほら言ったじゃないか、と半ば呆れながら嘆息する頭の中の声に反論する余地もなく、あたしはあれよあれよと言う間に抱え上げられてしまう。

「ちょっと！　出島さん！　本気で嫌なんですってば！」

「はい。　分かってますよ？」

このまま、身ぐるみはがされるのかと想像して、躍起になって言えば、出島さんからは冷静な返答が。

「分かってるなら……」

尚も言いかけたあたしの口元に、出島さんはそっと人差し指をあ

てる。　先程よりも穏やかな笑顔を向けると、言った。

「うららさんのお着替えは、見ません。　でも、早く着替えてしまわれないと、風邪を引いてしまうでしょう？　身体もこんなに冷えていますし、髪の毛だって乾かさなくては」

「な、なら、良いんですけど……」

急にしおらしくなられると、途端に居心地が悪くなる。　こんなとき、出島さんって、馬鹿ばっかりやっているけれど、一応年上なんだなあ、なんて当たり前のことに気付く。　反対にあたしは、背伸びばっかしているけれど、いつまでたっても子供なまんま。　大人になるなんてこと、もっと簡単なことだと思ってたのに、いつまでたっても思い描いていた大人には近付けない。　出島さんは、こんなあたしのこと、面倒だなって思ったりしないのかな。

「うららさん？　どうかしました？　お姫様抱っこに見せかけて、太ももの感触を楽しんでいるのがばれましたか？」

「ばらさないでください。　楽しまないでください。　ばらしてからも、さわさわしないでください。ていうか、下ろしてください！」

「どうして？　恥ずかしいからですか？」

「は、恥ずかしいに決まってるじゃないですか」

「どうして？　ここ、うららさんと僕しかいませんよ？」

「で、出島さんがいるから、出島さんがいるなら恥ずかしいんです」

あたしの顔を覗き込むように顔を近付けてくる出島さんから逃れる術もなく、あたしは両手で自分の顔を覆う。

「嬉しいなあ」

そんな言葉が聞こえたかと思えば、おでこに音を立ててキスをされる。

「ありがとうございます、うららさん」

何に対してのありがとうなのか、あたしには分からない。　それを尋ねようと両手の隙間から出島さんを覗き見ると、出島さんの瞳とばっちり目が合ってしまう。　更に何も言えなくなって体を強張らせるあたしを、そっとベッドの上に戻してから、出島さんは立ち上がった。

「さて、と。　よくよく考えたんですが、やっぱり、うららさんにはその服が一番が似合うと思います。　僕は、ちょっとやらなくてはいけないことがありますので、ここから離れます。　安心して、着替えてくださいね」

では、ときびすを返して去っていく出島さんの背中を、あたしは困惑の眼で見つめる。

出島さんって、本当に読めない。

無自覚は罪か否か（前書き）

長い！長いよ！出島さん、暴走し過ぎだよ！
というわけで、今回も、うらら譲と出島さんのみのお話。
次話からは、放っておかれっぱなしの岡崎くんと猿人種も出てきます。
今回、徹頭徹尾、うらら嬢を恥ずかしい目に遭わせてみました。
出島さんの視点にたって、にやにやしていただければ、作者冥利につきるというものです。

無自覚は罪か否か

ひとり、ベッドの上に放っておかれたあたしは、ようやっと肩の力を抜いて息をついた。

出島さんがいなくなっただけで、部屋はしんと静まり返っている。空気が微動だにしない。　その静寂は、周りの家具をも色褪せさせる。　いつも、そう。　出島さんと一緒に見た景色は、出島さんがいなくなると、途端にアルバムに収められた写真みたいになってしまう。

普通に息を吐いたつもりだったのに、静まったこの空間では、それすらもため息のように聞こえる。

ひとしきり、何を見るでもなく、漫然と部屋を見渡した。　そして、出島さんが似合うと言ってくれた服に視線を落とす。

何ていう色なんだろう。　ゴールドではあるんだけど、ぴかぴかした成金っぽい色味ではなくて、もっと控えめな色。　天井から吊されたシャンデリアの光を受けて、きらきらと控えめに、でも美しい反射を返す。　そっと手を伸ばして、ドレスだと思われるそれに触れてみた。　触った瞬間に、これは上等な生地なんだと分からせるその手触りは、思わずずっと撫でていたくなるほど。

「きれい……」

両手にとって、目の前で広げてみる。　ボートネックとVネックのあいのこのような襟元。　ノースリーブの、シンプルなドレス。

少しだけ高い位置からふわりと落ちるスカートライン。

「きれい……」

もう一度、呟いてから、あたしはベッドから立ち上がる。

このきれいなきれいなドレスが、あたしに似合うって？

そう言ったのが出島さんでなかったら、完全に皮肉だ。　出島さんの場合は、酔狂かな。　そこまで考えて、またしても、可愛いことを思いつかない自分にげんなりする。

ドレスをベッドの上に置いて、きょろきょろと左右を見渡した。

「出島さん？」

一応、声をかけてみる。　この部屋がどうなっているのかは知らないけれど、あたしが入ってきた扉も閉まったままだし、出島さんからの反応もないし、とりあえずはセーフだということにして、あたしは、濡れて肌にまとわりつくトップスに手をかけた。

体育なんかでも着替えが早いあたしは、あっというまに着替えを終わらせる。

いや、違うか。　厳密に言うと、自分が出来る分の着替えを終わらせた。

さっきドレスを見たときには気がつかなかったのだけれど、ドレスの後ろが、すごいことになっていた。　ジップになっているかと思われた後ろにそれはなく、サイドにももちろんジップはなく、だからといって被れるタイプのドレスでもなく。　なんと、後ろが、総ボタンになっていた。　しかも、貝殻のすごく華奢なボタンがたくさん並んでいるタイプ。　もちろん、着るときに、それらを全て手で外さなくてはいけなかったのだけれど、そのときは割とすんなりと外せるボタンだったから、自分でも留められるんじゃないかと思ったのだ。

あたしが、甘かった。

全部で二十個くらいついていたであろうボタンのうち、腰に近いところの数個は、何とか自分で留められた。　でも、その位置から上はまったくだめ。　顔が真っ赤になるくらい頑張ってみたけれど、どうしても自分では留められない。　息が少し上がるくらいまで挑戦したあと、どうにも出来ないという事実を認めざるをえなくなった。

脱いだ服が視界に入る。　あれに着替える、という選択肢ももちろんある。　でも、すでに濡れている服を着たままいるのと、わざわざ濡れている服に着替えるのとでは勝手が違う。

どうしよう。

背中のボタンを半端に留めたまま、あたしはベッドの前に仁王立ちになって、この局面をどう切り抜けようかと悩む。

「ああ、やっぱりこの色は、うららさんによくお似合いですね」

どこから出てきた！と叫びたくなるくらいに、猫の足音よろしく出島さんがいつの間にか背後に立っている。　それだけではなくて、うっとりとした声と共に、出島さんの指を思われるものがあたしの背中を這う。　ボタンが外されたままの、背中に。

「ひゃああ！」

情けない声を上げて体をよじらせれば、腰をつかまれ、更にぞわぞわと体全体に悪寒みたいなものが走る。

「で、出島さ」
「じっとしててください。　ボタン、留めますから」
そう言われれば、あたしは抵抗すら出来ない。　言われた通りにじっと立ち尽くすと、出島さんがボタンを留めにかかった。　またセクハラ行為に走るんじゃないかと危惧したものの、きちんとボタンに取りかかる出島さんに、正直あたしは驚きを隠せない。　ただ、ボタンを留める際に、少しだけ、ほんの少しだけ肌に触れる出島さんの指の感覚に、あたし野肌は何度も粟立った。
恥ずかしい、の許容量をはるかに超えている。
「はい。　終わりましたよ」
出島さんが明るく言うけれど、咄嗟にあたしは何も言えず、こくこくと何度も頷くだけだ。
「うららさん？」
「見ないで！」
訝しんだ出島さんが、顔を覗き込もうとするので、あたしはくるりと体を半回転して背中を向ける。
「どうしました？　お気に召しませんでしたか？」
「そうじゃなくて」
「他に、お気に召されたドレスがあるなら、着替えていただいても良いんですよ？」
「そう、そうじゃなくて」
「シャンパンゴールドは、うららさんの肌をきれいにみせますよ

ね。　あ、元々きれいな肌のうららさんだから、余計に、ですけど」

まともな返答も出来ないあたしにはお構いなしに、出島さんが満足げに言って、後ろから二の腕をさする。

「ひゃっ！」

何なの。　何なの、あたし。　何か、病気とかなの、あたし？　何で、出島さんが近付く度に、心臓がばくばくするの。　何で、出島さんがあたしに触れる度に、電流が走ったみたいになっちゃうの。

あたし、おかしいよ。　絶対、おかしい。

「あ。　髪の毛。　乾かさないとですね」

どっくんどっくんと、心臓がありえない自己主張を始めたあたしの体は、最早あたしが制御出来るものではないみたいで、出島さんの言葉が、時差でもあるみたいに遅れて聞こえてくる。

床の一点を凝視したままのあたしの耳に、衣擦れの音がする。と思ったら、腰に手を回されて引き寄せられ、ベッドのある位置に横座りさせられる。　ただし、残念ながらそこは、ふかふかのベッドの上なんかじゃない。　ベッドの上に座った出島さんの膝の上である。

「わ、わっ」

またしても時差付きでやってきたショックから、あたしは手足をばたばたとさせてそこから逃げ出そうとするけど、出島さんの片腕ががっちりと腰に回っているので、バランスを崩すことは出来ても逃げ出すことが出来ない。

「で、出島さん」
「はい？」
「な、なんで」
「どうしました？」
「なんで、な、なんで」
「なんですか？」
「こ、こんな、格好、その、恥ずかしい、ん、ですけど」
「知ってます」

いけしゃあしゃあと言う出島さんの瞳が、いつもよりも意地悪な輝きを見せる。

「鬼畜！」
「お、新しいですね。　鬼畜。　良いですねえ。　うららさんに言われると、何だかぞくぞくします」
「変態！」
「そうですよ？　僕は、うららさんが関わったことにだけ、理性を大幅に失うんです」
「大幅に？　嘘つかないでください、本能丸出しのくせに」
「僕が本能丸出しにしちゃったら、うららさん、この部屋から一生出られませんよ」

恐ろしいことをさらりと言ってのけると、出島さんは空いている手で、どこから手に入れたのか、タオルをあたしの頭の上に置く。
それを、優しく動かして、あたしの髪から水分を取っていく。

「ど、どういう意味ですか」

タオルがあたしの視界を遮ることで、何となく安心する。　何ら、

状況は改善されていないのだけれど、出島さんの瞳が直接見えないと、自分のペースを取り戻せるような気がするから。

「んー？　だって、こんな傍にうららさんがいるんですよ？　どうしてわざわざ、外に出ようなんて馬鹿なこと考えるんですか？　ここにうららさんを閉じ込めちゃえれば、僕は、何も心配しなくて済むじゃないですか」

「心配？」

「心配です。　岡崎さんに、あんな笑顔を向けているなんて、心配になります。　僕が本当に本能だけの生き物になっちゃったら、今後一切、うららさんが僕以外の人間に笑顔を向けるのを禁止しますね」

「はあ……」

出島さんの言ってることは、意味が分からない。　岡崎と一緒に笑ったからって、どうだと言うんだろう。　そんなこと言ってたら、あたし、学校行けないじゃない。　しょっちゅう笑ってるのにさ。

タオル越しに頭皮をマッサージされて、うっかり気持ち良くなってしまう。　どこで覚えたんだろう、出島さんたら。　マッサージが上手いだなんて。　毛先をタオルでくるんで、とんとんと叩く。

「終わりですか？」

タオルが離れたのを見て言ったら、腰の手に力を込められた。

「まだです」

すちゃ！と出島さんの胸ポケットから櫛が出てくる。　用意周到すぎる。

「ふふふ」
「なんですか」
あたしの髪を梳きながら、ふいに出島さんが笑う。
「だって。　うららさんが、僕の膝の上にいるんですよ？　うららさんが、ドレスを着て、僕の膝の上に座って、髪を梳かされているんですよ？　うららさんが。　僕のうららさんが」
「誰が出島さんのですか」
「うららさんです」
「あのですね！」
「そして、僕はうららさんのものです。　全部、まるごと、うららさんのものです」
「し、知りません、そんなこと！」
出島さんたら、本当にどうかしてる。　リアクションに困ることばっかり。
負け惜しみみたいに聞こえたであろうあたしの言葉に、そっと笑って、出島さんはゆっくりと櫛を動かす。　少しでも櫛がつっかえると、わざとなのか何なのか、顔を近づけてくるのだ。　その度に体に力を入れるあたしの頭頂部に、とうとう、出島さんはゆっくりとキスを落として、
「はい。　終了です」
言いながら、出島さんが腰にやった手から意識的に力を抜いた。
俯きがちにありがとうございますと呟いて、あたしはそそくさと立ち上がる。

「あ、待ってください。　裸足でどこに行くつもりですか？」
「あ」
そういえば。　元々履いていたサンダルは脱ぎ捨てたんだった。
いやでも、このドレスにあのサンダルを履くべきでないことくらい、おしゃれでないあたしにだって分かる。
「どうぞ」
柔らかな笑みと共に、靴が差し出される。　ドレスについたボタンと同じ色をした、淡い色をした靴。
「きれい」
ボキャブラリーの乏しいあたしの言葉に、出島さんは満足そうに頷く。
「うららさん、僕の肩に手を置いてください」
靴のたもと、あたしの足元に出島さんがしゃがみ込む。　何がどうなっているのか分からなかったけれど、おずおずと出島さんの肩に手をのせた。
片方ずつ、出島さんがあたしの足にはめ込むようにして靴を履かせてくれる。　靴もそうだけど、ドレスも、サイズぴったりなんだった。　どうやって調べたんだろう。
「秘密です」
あたしの頭の中を見たらしい出島さんが、悪戯な微笑みを上目遣

いと共によこしてくる。　思わず、背の低い女子に萌える男子の気持ちを理解しそうになって、軽口を叩くことで誤魔化す。

「どうだか」

「さて。　参りましょうか、うららさん？」

立ち上がって、手を差し出す出島さんを見て、あたしは今更なことに気が付いた。

「あれ？　出島さん、いつ着替えたんですか？」

そう。　出島さんたら、いつものカジュアルな格好ではなかったのだ。　濃紺のプレスの利いたパンツに、ウイングチップのキャメルの革靴。　真白いシャツに、パンツと共布のベスト。　そして、濃紺のベルベットジャケット。　胸元からは、褪せたブルーのポケットチーフ。

「そんなに見つめられたら、襲ってしまいそうになります」

爽やかな笑顔でえげつないことを口にする出島さんは、でも、問答無用に美しかった。　のぼせたみたいな感覚で出島さんの服を見て、そのまま、出島さんの顔を見つめる。　焦点が定まらないものの、出島さんの瞳がこちらを見ていることに気付く。

ぱっと実が弾けるようにして、あたしは急に目を覚ます。

初めて会ったときと、同じだ。

出島さんの瞳を見つめていた自分に気付いて、顔が赤くなるのを感じる。　目を逸らそうと、目を逸らさなければとたじろいだその一瞬で、出島さんが距離をつめる。

「なけなしの理性を奪うおつもりですか？」

呟いて、強引に唇を重ねられる。

「意味が、分かりませ、んっ」

空気を吸えるその合間で言い返したら、にやりと不遜な笑みを浮かべられる。

「では、そのまま。　無自覚なままでいてください」

結局、出島さんに手を引かれて部屋を出る頃には、あたしの髪はもう一度櫛が必要なくらいにぐちゃぐちゃになっていた。

柔らかな拒絶

恥ずかしいから嫌だと言っているのに離してくれない手はそのままに、あたしは衣装部屋を後にした。

入っていたのは、ほんの数十分だったと思うんだけれど、目の前で歯を見せて笑いかけてくれる岡崎の姿を目にして、浦島太郎の気分になる。良かった、あのままあの部屋に一生閉じ込められなくて。そして、つい先程までの出来事をまざまざと思い出してひとり、顔を赤くする。

「お。似合うじゃん」

「え？あ、ああ……」

屈託なく言う岡崎の褒め言葉に、あたしはまたしても顔を赤くする。ここで本来は、えへへーなどと笑って、くるりと一回転してみせて、スカートの広がり具合を見せびらかすのが可愛い女の子の基本なんだろう。残念ながら、あたしにはそんな小器用な技など備わっていない。

上手く反応出来ないばかりか、下を向いて黙りこくってしまったあたしに、岡崎は、

「さすが、出島さんだな。黄本のこと、よく分かってるっていうか。黄本のことしか頭にないっていうか。だって、おれなんてこれだぜ？」

そう言われて初めて、あたしは岡崎の着ているものに注意を払う。

「着替えたの？」

「着替えさせられたの」

「着替えさせられたんだ」

「そ」

着替えさせられたとか、これ、とか言っているけれど、岡崎の着ているそれは、彼に良く似合っていた。何ていうんだろう。ヨーロッパの時代劇なんかに出てきそうな感じ。でも、王子様って感じじゃなくて、えっと。こういう服、何て言うんだっけか。

「ふっとまんー」

「ふっとまんー」

どこから湧いて出たのか、猿人種があたしの左右からスピーカー発言を繰り出す。しかも、ひとの頭の中を覗いていたかのようなタイミングで。

「ふっとまん？」

聞き返しながら、左右の彼らを見ると、ふたりとも岡崎と同じ服装をしていた。

「フットマンだってさ。っていう役職があったらしいよ、昔」

ということは、この服は、一種のコスプレみたいなもの？

「今日は皆さん、使用人ですからね」

丁寧に説明してくれる岡崎の隣にやってきて、何気に辛辣なことを口にする出島さん。猿人種の膝の裏に蹴りを数発入れて蹴散らすと、あたしの背後に回り、貼り付いたような笑顔のまま、肩に手を置く。

「使用人って、出島さん。失礼じゃないですか。岡崎はもちろん

のこと、猿人種のふたりだって、出島さんが勝手に連れて来たんでしょう？」
「うららが正しい」
「お前が悪い」

あたしの言葉に後押しされたのか、猿人種が、げすげすと出島さんの背後から蹴りを入れる。

「貴方たち」

えらく凄みのある声を出して、出島さんが後方を睨んだ。その眼光からビームでも出ているのか、さっと後退すると、にゃんこ口をすぼめて、

「卑怯だー」
「鬼畜だー」
「ずるいぞー」
「ひどいぞー」
「うらら独り占めすんな」
「うらら返せよ」
「血迷いましたか？うららさんが、貴方たちのものなわけがないじゃないですか。うららさんは、僕のものです。その証拠に、今あの衣装部屋で僕はうららさんの柔肌に、いたたたたたたた」

堂々と胸を張って、自らのセクハラ履歴を岡崎の前でばらすつもりの出島さんの手の甲を、思い切りつねってやった。それだけじゃない。あたしは、誰のものでもないはずなんですけど。出島さんてば、本気で誰かを自分の所有物に出来るだなんて思っているんだろうか？だとしたら、どうやって所有するの？

「いたたた。痛いじゃないですかー、うららさん」
「へん、ざまーみろー」
「へん、いい気味だー」
「一度死んでみますか……？」

そしてコントが始まる。またしても、だ。

がっくりと肩を落として呆れたあたしに、この場で唯一の常識人が慰めてくれる。

「はは、元気だなー」

前言撤回。岡崎は、常識人と呼ぶには、人間が出来すぎている。

真っ白ではないものの、素朴な白をしたブラウスの襟元には、深緑のリボンタイ。サテン生地で出来ているらしい深緑のベストに、厚手の黒のパンツ。長靴に良く似たブーツは、黒と深緑のツートーンカラー。誰が選んだ服なのか、岡崎にしてもそうだけど、猿人種のふたりも良く似合っている。

「岡崎も、それ」
「ん？」
「似合うね」
「ありがと。こんな堅苦しい服着たの初めてだからさ。何か緊張するよ。おれなんてさ、始め、このリボンみたいなやつ、どうやってつけて良いのか分からなくてさ。ひとりでおたおたしてたら、あそこのふたりが手伝ってくれたんだよ」
「猿人種のふたりが？意外」
「だろ？案外、悪いやつじゃないのかもなー」

楽観的にそう言うと、岡崎は、未だ出島さんと体を張ったコントを繰り広げるふたりに目をやった。岡崎の視線を追って、あたしもふたりに目を向けると、ふとその内のひとりと目が合った。癖の強い方の髪の毛だから、あれは花梨さんの方か。

「うららー」

花梨さんは、するりと出島さんの腕をすり抜けると、一目散にこちらへ駆けてくる。くるくると丸い瞳をあたしにだけ見据え、にゃんこ口はそのままに、花梨さんはにへら、と緊張感の伴わない笑顔を作ると、

「行こう」

あたしの手を取った。

「あああ！」

「ああああ！」

これに、もうひとりの猿人種、馨さんと出島さんが同じ反応を同じタイミングで返す。ふたりは、いつから双子だったのだろうと首を傾げたくなるほどに酷似した動きで、両手で頭を掻きむしった。

「何してるんですか！」

「ずるいよ、花梨！」

台詞は違えど、ふたりは苛立ちを露わにして、つかつかとあたしに近寄ってくる。空いている方の手を馨さんが掴めば、出島さんは真正面からあたしの頭を胸に引き寄せる。と、ここでまた抗議の声があがる。

「おい、水棲種」

「反則だ、反則だ」
「何が反則ですか」
「うららを離せ」
「貴方たちがうららさんを解放してくれれば、僕も安心してうらさんとラブラブ出来るんです。早くその薄汚い手を離しなさい」
「嫌だ」
「絶対、嫌だ」
「ふん。小癪な。まだ、うららさんが誰のものか、分かっていないようですね。いいですか？うららさんは、僕の」
「あたしは、誰のものでもありませんけど」

冷たい声音でそう釘を刺すと、うっと言葉を詰まらせた出島さんが、おそるおそるあたしの顔を覗き込む。

「う、うららさん？」
「なんですか」
「あ、冷たい！冷たい声だ！」
「用件は、なんですか」
「お、怒ってらっしゃいます？」
「怒ってませんよ。愛想がついただけです。出島さんの、自分勝手な言い分に。あたしが、いつ、出島さんのものになったんですか？」
「え、あ、あの、それは、ですから……。じょ、冗談、です。よ……？」
「冗談だとしたら、世界一つまらない冗談ですね」

おろおろする出島さんと、一向に眉間に寄った皺を直そうとしないあたしに、敏感に異変を感じ取った猿人種は、そろそろと握っていた手を離す。そして、なるたけ音を立てないように、後退していった。もちろん、猿人種のことなので、後退する途中に踵で廊下に

無造作においてあったテーブルを蹴ることも忘れない。派手な音を立てて、ブーツがテーブルの脚にぶつかる音がした。

「う、うらら、さん……？」

出島さんがあたしの名前を呼ぶけれど、返事をする気にもなれない。

さっき、ふたりっきりの時に、出島さんは言った。出島さんは、あたしのものだって。あたしは、出島さんのものだって。

でも、だったらどうして、あたしは『あたしのもの』の筈の出島さんに、会えないの？同じ屋根の下に暮らしていたって、出島さんはずっと家にいない。出島さんのお仕事が不規則なのは知ってる。急に出張の話が来ることだって、知ってる。でも、あたしはいつも、それを知らされない。出島さんはいつだって、急なんだ。急にいなくなって、急に帰ってくる。そしてあたしは、それに振り回されるだけ。

いつ帰ってくるのだろうと、誰もいない部屋を眺めるあたしは、何て鬱陶しいんだろう。そう思ってたから、何も言わなかった。

いついなくなってしまうか分からない出島さん。そんなひとを、『あたしのもの』だと、どうやったら思えるんだろう。あたしが、『出島さんのもの』だなんて、どうやったら分かるの？あたしは、『出島さんのもの』だから、一言もなしに急にいなくなられてしまうの？

結局のところ、あたしは出島さんの何なんだろう。

「出島さん」

徐々に目頭が熱くなってくるのを感じる。岡崎や猿人種のいる前で涙なんて流してしまったら、恥ずかしさで地球の真ん中まで穴が掘れるな。どこか冷静に、そんなことを思ったときに、助け船を出してくれたのは、岡崎だった。

「さっき、おれらどっか行くって言ってませんでしたっけ？しかも、誰か待たせてるとか言ってませんでした？」

「あ、ああ……。そうでした。うららさん、こちらです」

はっと岡崎の言葉に目を覚ました出島さんは、額に手をやって一、二度頭を左右に振った。何かのスイッチを切り替えるように一度目を固く瞑った後、あたしに向かって弱々しく微笑む。

それに罪悪感を感じないではなかったけれど、こうなってしまうと、後には退けない。ここで、何事もなかったように接するのが大人な振る舞いなのかもしれないけれど、あたしは自分を律することを今回は放棄して、出島さんが伸ばしてきた手をやんわりと振り払った。

「先、どうぞ。今は、一緒には歩きたくありません」

言いながら、あたしは何て馬鹿なんだろうと思った。もっと上手く振る舞えないのか、となじる声を聞いた。それでいて、紡いだ言葉は、あたしの制御が及ばないどこかからゴーサインをもらって口をついて出る。

考えてみれば、こんな風に出島さんを拒絶したことは、これまでになかったかもしれない。その可能誠に気付いて、更にばつの悪い思いをしたあたしは、視線を所在なげに床に巡らせた。だから。

「わかりました」

落ち着いた声音でそう応えた出島さんが、どんな顔をしていたのか、あたしには知る由もない。

浅はかな不安、子供っぽい安堵

沈黙が天井から降り積もるようだった。全員が全員、沈黙を肩に乗せて歩いているような。黙々と歩けば、それは音もなくあたしたちの肩からこぼれ落ちて、無骨な飴色をした床の目の中に吸い込まれていく。みんながみんな革靴を履いているせいで、かつんかつんと上等な音を立てて踵が床に挨拶をする。それだけが、今のあたしたちが創り出す音だった。

出島さんの『うららさんは僕のもの』発言に腹を立てて厳しくあたってから以降、目に見えてぎくしゃくした出島さんとあたしは、それからどうやって会話をすれば良いのか分からず、今に至る。

先頭をきって歩き始めた出島さんの後を、従順に追いはしたものの、並んで歩くことにはやっぱり抵抗があって、あたしはわざとゆっくり歩いていた。

あたしが怒ったのが嫌だったのか、気まずかったのか扱いにくいと判断したのか、さっぱり分からないけれど、猿人種でさえもあたしに近付こうとしない。ついでに言えば、出島さんにちょっかいを出すのもやめたみたいだ。

先頭を歩くのは出島さん、ただひとり。その後を、猿人種が大人しくついていっている。そして最後尾は、あたしと岡崎。

岡崎も、あたしの隣を歩いているというだけで、一言も口を開こうとしない。

こうなってくると、どんどん気持ちが沈んでいく。いや、勿論、そもそも気持ちは明るくはなかったのだけれど。今にして思えば、勢いに任せてみんなの前で出島さんに辛くあたったりして、浅慮だ

ったかもしれない。違うな。浅慮だったんだ。考えなしに行動して、気持ちのままに言葉を紡いで、あたしは何て子供なんだろう。本当に、嫌になる。

自己嫌悪の念で、自分の頭をぽかすかと殴りたい衝動に駆られていたあたしの傍で、小さい音がした。隣に歩いているのは岡崎で、前を行く猿人種と出島さんとは結構な距離がある。とすると、今のは岡崎の方から聞こえてきた音なわけだけど……。

今の音、我慢していたのにとうとう堪えきれずについつい吹き出した、みたいな音だったんだよね。

でも、そんなことって、ありえる？

これだけ空気の悪くなった中で、何かに笑い出すような事態なんて、ないよね？

「岡崎？」

何かの聞き間違いだったかもしれない。そう思いながらも、あたしは溢れ出んばかりの自意識過剰に後押しされて、隣の岡崎を横目で見上げてみた。

「あ、ごめん」

驚いたことに、言いながらあたしを見た岡崎の口元はふるふると震えていた。それも、中途半端な笑顔を作ったまま。

「え、なに。笑ってるの？」

「だから、ごめんて」

「何で？　何笑ってるの？　何か可笑しかった？」

鷹揚な苦笑を見せる岡崎に、矢継ぎ早に質問を重ねるあたし。無論、これすらも、あたし自身が笑われたのではないかという被害妄想から来ているのだろうけれど。

「可笑しいっていうか」

と、ここでまたしても吹き出しそうになった岡崎は、驚きと怯えとやきもきといらいらがない交ぜになったあたしの視線をもろに受けて、こほんと咳払いをした。

「いや、違うよ。黄本のことを笑ってるんじゃないって。今のこのぎくしゃくした雰囲気を楽しんでるんでもない。ただ、さ」

「ただ。なに」

「まあまあ、そういきり立つなってば。ただ、な。黄本って、あんまり表立って怒ったりしないじゃんか。新鮮だなって」

「新鮮だからって、笑うの？」

岡崎が言っている単語は全て理解出来る。文章だって。でも、岡崎が何を言いたいのか、あたしには分からない。そして、分からないという気持ちが、更にあたしの落ち着きを奪っていく。

「だーから。違うって。新鮮だから。少なくともおれは、お前がたすくと喧嘩する以外では見たことなかったからさ。怒ったりとか？　だから、なんだ」

ぽり、とこめかみを掻いて、岡崎がばつが悪そうな、恥じらいだような顔であたしを見た。歩みは止めていない。かつんかつんと、革靴が床に当たる音だけが規則正しく耳に届く。

「なに」

ここまできたら、みなまで聞かなくちゃ気が済まない。

「なに、って。本当に分からない？」
「何がよ」
本当に訳が分からなくて、困惑した顔そのままで岡崎に言えば、彼はふうとため息をついた。そして、あたしに聞こえるか聞こえないかの声量で独りごちる。
「出島さんも、難儀するよなあ」
「は？　何でそこで出島さんが出てくるの？」
「おお、聞こえてたのかよ。意外と地獄耳だな、黄本」
「うるさい。本当に聞かれたくなかったら、頭の中で考えるだけにすればいいじゃない」
「ごもっとも」
「それで」
「ん？」
「何なのよ、一体。焦らさないで、早く言ってよ」
「言ったら、黄本怒るかも。今より怒るかも。あ、でも、それはないかな。おれは出島さんじゃないから」
「意味が分からない。何なのよ。とっとと言ってってば！」
だんだん我慢しきれなくて、声に焦燥感の色が濃くなる。反して岡崎は、あたしの隣を澄ました顔で歩きながら、不出来な生徒にわざと難問を投げつける教師のそれで微笑むのだ。
「岡崎」
声を低くして言えば、岡崎は先程の澄まし顔から、いつもの幼馴染みの顔に戻った。

「らしくないことをしてしまうくらい、出島さんに振り回されるってのはさ。つまり、それだけ、黄本が出島さんのことを大事にしているからなんだよなって思ったら、なんつーか、しゅんとしている出島さんも、自己嫌悪に陥っている黄本も、可愛いよなあって思って。だから、笑ったんじゃないぞ？」

「そ、そんなこと。で、出島さんが、だ、大事とか」

「ああ、いい、いい。別に言い訳しなくても良いって。おれ別に、黄本に出島さんののろけ話して欲しくて言ったんじゃないからさ」

「のろけ話なんて」

あたしは絶対にしない。出島さんなら別かもしれないけど。

「したくても、恥ずかしくて出来ない？」

「違う！」

からかわれていると分かっていても、あたしは噛み付くように岡崎の言葉を否定した。

「わっかりやすいなあ」

「うーるーさーい、もう」

「へえへえ。そりゃおれが悪うございました」

顔を真っ赤にして足元を見つめるあたしの頭上からは、謝罪の言葉を口にしながらもくすくすと笑っている岡崎の声。

「大丈夫だよ」

ふいに大人びた声で言われて、はっと顔を上げる。そこには、どこか達観した顔をした岡崎。あたしの視線に気付いたのか、首をこちらに向けて横目にあたしを見ると、邪気のまったくない笑顔を見

せた。

「出島さんなら、大丈夫だよ。黄本が心配するようなことは、ないと思う」

「あたしが心配するようなことって、なに？」

「何かなんて、分からないって。ただ、今、黄本がもやもや感じていること。それが、心配の種だろ？　それが何かを決めるのは、おれの仕事じゃないからさ。でも、その心配の種が何であれ、どれだけ根の深いものであれ、大丈夫だよ」

「何でそんなことが分かるの」

「さあ？　何でだろうなあ？」

あたしにしては直接的に突っ込んでみたつもりだったのに、ひらりと躱されてしまう。狡い。岡崎って、こんなだったっけ？

「岡崎って」

いつからそんなませたこと言うひとになっちゃったのよ、と文句を言おうと口を尖らせたところだった。

「ぶっ」

岡崎の方にばかり目をやっていて、前方を見ていなかったあたしは、盛大に鼻をぶつけた。固くはないものの、結構な勢いでぶつかってしまったので、あたしは無様な声を上げる羽目になる。

「いたた。あ、馨さん」

「うらら」

どうやら、歩くのをやめた馨さんの背中に、突っ込んでいってしまったらしい。あたしがぶつかったのを毛ほども感じていないのか、

緩慢な仕草でこちらを振り返る馨さんは、無気力な声であたしを呼んだ。

「なんですか？」
「着いたよ」
「ここだって」
「え？」

馨さんに加わって、花梨さんが言う。ぼんやりと目で示された先には、ひとつの扉。これまでの扉ととても似ていて重厚だ。鈍く光る金色のドアノブに手をかけた出島さんが、あたしを見ているのに気が付いた。その瞳がとても寂しそうで、あたしは特大級の罪悪感を感じるけれど、弱々しく微笑んでくる出島さんに同じものを返せるほどの勇気は出ない。代わりに、ぱっと目を逸らして下唇を噛み締める。

ため息のようなものが聞こえたような気がする。それが誰のものだったのか、はたしてそれが幻聴だったのかどうかさえ確かめる間もなく、扉が開く音がした。かちゃりとドアノブが回る音がして、重くいかめしい扉が開くと共に、部屋の中から鼻孔をくすぐる花の匂い。扉が動くことによって感じる、かすかな風が足元をかすめていく。

「うららさん。どうぞ」

出島さんの声が、ひどく遠くから聞こえているみたい。

「……はい」

返事もしないのではさすがに失礼過ぎるんじゃないかと思い、あ

たしは掠れた声で答えた。

すっと二手に分かれて道を開いてくれた花梨さんと馨さんの間を通り、岡崎の保護者のような視線を背中に感じ、ドアノブに手をかけじっと佇む出島さんの靴の先を見つめ、あたしは開かれた部屋へ向かう。出島さんとすれ違うとき、心臓がびくんと飛び跳ねた。

心配。あたしが？　何に対して？

出島さん。あたしは。あたしは――。

言いたいことがあるはずなのに、掴みたい思いがあるはずなのに、霞を掴むが如く言葉にしようとすればするほど、あたしは混乱していく。

折角、久しぶりに会ったのに。

そう思ったら、胸が痛んだ。馬鹿なあたし。我が儘なあたし。今のこの事態を招いたのは、誰でもなく自分なのに。

その場にしゃがみ込んで、膝小僧の中に顔を埋めてしまいたい。ここから、走り去ってしまいたい。

ぐちゃぐちゃになった頭のまま、あたしの足は機械的に動いて、気付けば部屋の中へと踏み入っていた。

「お待ちしておりました、お嬢様？」

低く甘く、抗えない魅力を持った声がする。それは聞き慣れた声。久しく聞いてはいなかったけれど、それは紛れもなく懐かしいもの。

反射的に顔を上げたあたしは、どんな顔をしていたんだろう。

決して嬉しそうな顔はしていなかったんだろう。証拠に、あたしの顔を真正面から見据えたそのひとは、一瞬だけ面食らった顔をした。ただしそれは、本当に一瞬の出来事で、瞬きひとつの間に、いつもの闇色の瞳を蠱惑的に輝かせ、誘いかけるような笑みを形の良い口唇に浮かべている。

「賢介さん」

その名を呼んだあたしは、正直、安堵の気持ちでいっぱいだった。

「久しぶり」

友好的、よりも数段セクシーな発音で言うと、

「似合うね、そのドレス」

「あ……」

そんなお世辞に何て答えて良いのか分からない。代わりに賢介さんを褒めることにした。

「賢介さんこそ。お似合いですよ」

そしてそれは、お世辞でも何でもなく見たままのことを述べたに過ぎない。ヨーロッパ映画から抜け出たような出で立ちの賢介さんは、洗練された容姿も相まってか、こうして既に知り合いでなければ話すのを躊躇うような雰囲気があった。

後ろが長くなった黒のジャケットにパンツ。中には黒のベストと白いブラウス。首もとにはシルクと思われる白のボウタイ。両手に白のシルク手袋をはめた賢介さんは、あたしの言葉に、フェロモンの蛇口を閉め忘れたような妖艶な笑みを浮かべると、わざとあたし

の耳元に近付くと囁いた。

「ありがとう。今からでも遅くないんだよ？　浩平から乗り換えるんならさ」

それが冗談であることは明白。だからこそ、あたしは笑顔になる。そして笑顔になって初めて、長い間顔が緊張していたことに気付いた。

「さあ、おいで。今日は、うららちゃんのための日なんだから」

手袋をした手で、慇懃に部屋の中を示される。

賢介さんの言った意味は分からなかったけれど、あたしは兎にも角にも頷いた。今のこの気まずい状況から少しでも離れられるのかと思ったから。例えそれが、子供っぽい浅慮だったとしても。

浅はかな不安、子供っぽい安堵（後書き）

やっと、賢介を出せました……！感無量。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3021m/

うらら嬢の更なる受難

2010年11月17日09時53分発行